

はしがき iii

序論

001

- 1 | 今、日本で、英文学にどう取り組むか？ 佐々木 徹 002
- 2 | 今、日本で、アメリカ文学にどう取り組むか？
— 学問と批評のインターフェイス 巽 孝之 010

第1部 英語を教える

021

- 1 | 英語力の不十分な学生に、文学テキストを使って教えるために
原田 範行 022
- 2 | 文学研究と語学学習—『ジェイン・エア』のバーサの表象に着目した授業案
斎藤 兆史 030
- 3 | 英文学的英会話教室—『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の場合
小林 久美子 039
- 4 | 英語と生命力—英詩が教える(かもしれない)言葉の運動感覚
阿部 公彦 048
- 5 | 創作的英作文の試み 北 和丈 056
- 6 | 戯曲から多様なアクティビティへ—『十二人の怒れる男』を教材として
中村 哲子 065
- 7 | たくさん読ませるための工夫 小川 公代 073
- 8 | ICTで教える 奥 聡一郎 081

第2部 社会・文化を教える

091

- 1 | 社会を教える：人種・階級
—文学とは、社会とのかかわり方のひとつのかたちである 中井 亜佐子 092
- 2 | 社会を教える：ジェンダー—わたしたちは複雑な関係性のなかで生きている
越智 博美 100
- 3 | 時代・社会を教える—イギリス「社会小説」と英文学教育
丹治 愛 108
- 4 | 時代・社会を教える—アメリカ「南北戦争」と文学 新田 啓子 115
- 5 | 表象文化(映画)を教える—「アダプテーション」というコンセプト
新井 潤美 123
- 6 | 表象文化(演劇)を教える—芝居の難しさと面白さ 岩田 美喜 130

第3部 英文学を教える

139

- 1 | 中世文学への誘い 唐澤 一友 140
- 2 | シェイクスピアの教室—作品との対話を深めるために 井出 新 153
- 3 | 英詩への誘い—大胆な仕掛け：教室のフェリシア・ヘマンズ
アルヴィ宮本なほ子 168
- 4 | 英詩への誘い—教室のホイットマン：“There Was a Child Went Forth”
長畑 明利 178
- 5 | 小説への誘い—小説の誕生 武田 将明 186
- 6 | 小説への誘い—ジェイン・オースティン『エマ』を読む 高桑 晴子 196
- 7 | 小説への誘い—「物語」を読むことの愉しみと難しさ 秦 邦生 205
- 8 | 小説への誘い—18, 19世紀文学を教える 中野 学而 214

- 9 | 小説への誘い—「入口」としての20世紀アメリカ小説 諏訪部 浩一 224
- 10 | 小説への誘い—英語圏文学を教える 中村 和恵 233
- 11 | ファンタジーへの誘い 伊藤 盡 243
- 12 | 児童文学を教える 佐藤 和哉 251
- 13 | 文学批評への誘い 田尻 芳樹 260
- 14 | 英文学と翻訳—文芸翻訳は多世界の発見に通じる 武藤 浩史 268
- 15 | 英文学と日本文学—日本人アメリカ文学者のアポロギア
後藤 和彦 278

付 録 289

1. アンケート：学生時代に読んで役立った本 290
2. 英文学研究・教育関連団体一覧 305

索 引 312

執筆者一覧 320

4

英語と生命力

——英詩が教える(かもしれない)言葉の
運動感覚

阿部 公彦

学生の英作文を読んでいたら目眩がした、頭が痛くなったといった経験をお持ちの教員は少なくないだろう。いかに英語を書く力を身につけさせるかは、英語教育の中でももっともハードルの高い課題で、そう簡単に答が出るものではない。従来の作文指導書とは別に、パラグラフ・ライティングなどフォーマットに注目した良い教科書も最近は出てきてはいるが、まだまだ道は険しいと言える。おそらく「教室の英語」の最終到達点はきちんとした英語を書ける学生を育てることにあるのだが、一足飛びにこの目標に飛びつくことにはやや無理がある。

本稿では、難易度の高い「英語を書く」という課題を視野に入れつつも、「英文学で」という観点から第一歩を踏み出す際にまず何ができるかということを考えてみたい。英語がうまく書けない理由はさまざまである。英作文の授業ではしばしば単語のスペリングから始めて、単語の組み合わせ、呼応関係、構文、冠詞の用法などいわゆる「逸脱事例」が徹底的に添削される。時間の制約もあり、教室の作文指導がこうした“間違い直し”に終始することも多い。

しかし、私たちが自分で文章を書くときのことを想像すればわかるように、文章というものは間違いをつぶしていけば自然と完成するようなものではない。というより、間違いさえ直してやれば指導になるという考え方には根本的に欠陥がある。マイナスだけではなく、プラスが必要なのである。添削や推敲はもちろん大事だが、その前に、そもそもモノがなければ始まらない。ここで言うモノとは「内容」という意味ではなく、文章が展開していくための生命の力のようなものである。文章は生き物である。形だけ整えてもそこには決して生命は宿らない。私たちが「文章が読める」とか「わかりやすい」と感じる時には、どこかでこの生命の力に発したノリのようなものが働いているのだ。したがって、英文を書く際の第一の

目標は、書き手の持っている動的な力を文章へと流し込むという点に設定すべきではないかと私は思っている。

あまりに壮大な目標に聞こえるだろうか。たしかに「動的な力を文章へと流し込む」などというやたらと神秘的に響く。はっきり言って、いかかわしいと思う人もいるだろう。しかし、これは英作文だけではなく、いわゆる「英会話」の技術とも大いにかかわるポイントなのである。英語で話しているときに相手とうまく意思疎通ができずにもどかしい思いがするのは、単語がわからないとか構文が作れないといったことだけでなく(それなら学校である程度やってきたはずだ)、こちらの意図の方向や感情のニュアンスをうまく運動感覚／ノリを伴った言葉へと展開できないことに原因がある。だからこそ、うまくいかない人が「知識はあるのになぜ?」と思う。むろんここで学校教育を「知育偏重だ」と批判しても仕方がない。

こうした問題が起きるのは、英語には英語なりの運動感覚の表出の作法があるということ私たちが十分に自覚していないからである。端的に言えば、書き言葉でも話し言葉でも、英語と日本語ではリズムの生まれ方が異なる。その違いは韻律法(prosody)や、調子(cadence)の違いなどとしても記述されうるだろうが、英語学習の観点からは、そうした抽象的な記述よりもまずは実際に学習者に異なるリズムを体験してもらうことが大事になる。そのことを通して、英語には日本語とは異なる固有のリズムがあるということを感じ取ってもらい、さらには書き手や話し手によってリズムの作られ方も違うのだといったことを、「なるほど」という思いとともに知ってもらいたい。そうした体験を通し、「あなたもまた自分なりのリズム＝生命力の担い手とならねばならないのだ。ことばを扱うとはそういうことなのだ」というメッセージを伝えたいのである。もちろん、日本語が母語の人であれば、まずは日本語のリズムや運動感覚に自覚的になることから始めてもらうのもいいだろう。いずれにしても、こうした体験のために文学作品がうってつけなのは明白である。問題はそのやり方である。

1. 2つ読む

教室で言葉の運動を体験してもらうにはどうしたらいいか。筆者がこうした場合に最適だと思っているのは、明瞭な対照性をもったテキストを比